

令和5年度 第1回豊田市文化芸術振興委員会 会議録（書面開催）

○出席者

（委員）※敬称略

- ・高北幸矢（委員長）、高橋秀治（副委員長）、藤田雅也、石黒秀和、伊丹靖夫、磯村美沙希、鈴木利恵、中佳子

議題 1

令和4年度豊田市文化芸術振興計画施策の評価及び検証【資料1】

※委員からの意見（一部要約）

施策Ⅰ <みる・ふれる> 多様な鑑賞・体験機会の拡充

施策Ⅰの総括について

- ・「子どもたちの鑑賞・体験機会を減らさないこと」は素晴らしい。コロナ禍においても、子どもたちの鑑賞・体験機会を重視し、鑑賞・体験の機会が保障されるように留意されてきたことは、大いに評価できる。
- ・「コロナの影響により鑑賞者数が少ない」という表現でどうしても定量的評価＝数字に意識が向かいがちになるが、「コロナ感染を防ぐために鑑賞者数を制限したり、回数を減じたりしながらも活動の継続に注力した」積極的な姿勢を強調しても良い。
- ・コロナ禍においても市民が多様な鑑賞や体験の機会を得られるよう感染対策などの工夫をし、各事業を継続・展開してきたことは高く評価できる。
- ・子ども向けの内容が充実し、企画側の工夫と対策が見てとれる。人数制限等の規制があっても、「継続すること」は芸術家を育てる部分も大きいいため踏ん張りどころではあるが、施設使用料の補助など行政からサポートがあったこともあり、大幅な集客減少（活動困難）は免れたのではないかと。

主な取組 指標1（定量的指標）実績について

- ・定量的指標は、行政として重要であり、励みとなるものだが、大きくとらえ、数字に振り回されずにいたい。文化芸術の数量化は難しいことを前提に。
- ・12件の主な取組に対する、現状値と2022年度実績に対しての定量的な検討が精緻にまとめられていると感じた。その中で、8件が現状値を上回る実績であり、4件が現状維持（横ばい）の実績であるとのことで評価できると思う。
- ・コロナ禍の続く現状において、定量的評価は難しいが、それでも本市は回復傾向にあると感じる。際限なく量が増えていくものでもないと思うので、最終的な目標値を設定し、現状値を評価する事業があってもいいような気がする。
- ・親子向けコンサートの企画・開催による鑑賞者数の大幅増加は、子育て世代がそれだけ機会に飢えている証拠でもあり、未来の表現者や鑑賞者である子どもたちにとっての原体験となり得る機会として大変意義を感じられる。

美術館の教育普及事業についても動画配信を利用して、時間や場所に縛られない気軽さの中での学びの機会が提供できたことが意義深い。子どもたちへのアプローチについても、ぜひこの形でも取り入れてほしい。

- ・まちなか芸術祭は大成功であったと言える。内容の豊富さ、アート作品との間に壁がなく実際に触ったりできることで質感も味わえ、より身近に感じることができた。SDGsで求められるダイバーシティが実現されており、人々に選択肢があることで、個々のスタイルで楽しめる自由性が市民に受け入れられたと感じる。

主な取組 指標 2（定性的指標）実績について

- ・「もっと聞いたことのある曲を演奏してほしかった」とあるが、自分自身の子ども時代にクラシックがどうであったを考えると、なじみのあるクラシック曲の役割は大きい。
- ・たとえば、No.10「美術館での教育普及事業」のように定性的指標が無記入で定量的な実績部分だけを見ることになると必然的に×表示となるが、評価の仕方として適切か。
- ・取組の選択、実施運営等、項目の狙いとするところの背景についての評価も欲しい。提供される企画にどう反応するかは多様であっていいし、意外な効果を発見することもあるだろうが、提供の意図への反応がどうなのかはフォーカスが必要。
- ・文化芸術の成果指標として、定性的指標は、今後、定量的指標より重要になると思うが、現状、本市の定性的指標はあいまいで、評価結果に対する正当性には疑問が残る。誰がどのような観点で定性評価を行うのか、引き続き適正な評価の在り方、方法について検討が求められる。
- ・「知っている曲が聴きたかった」という意見は音楽の普及啓発で必ず聞かれるが、聞いた事のない曲の魅力を伝えられる仕掛けを考えてほしい。その他実績欄に記載されている声は概ね良好であり、評価できるが、参加者の声が拾えない部分についてはぜひ声を拾う仕組みをお願いしたい。
- ・民芸作品の展示はどれも力作でした。少し購入可能スペースがありましたが、一点もののアート作品とは別にもっと身近なものを販売していただけたら嬉しい。また日常生活で使い続けることで素材の良さが実感できたりするので、小さくて消耗する手ぬぐいや手染めハンカチ等は特に女性に喜ばれる。（例：三河木綿）

指標 1 と指標 2 の補足説明について

- ・アーカイブ配信やオンライン配信は、もちろんプラス要素は大きいですが、多くの美術作品は、デジタル鑑賞を前提に制作されたものではないことを忘れないようにしてほしい。
- ・主に、評価についての、「○」「△」「×」についての補足説明がされていると理解した。ただし、評価が「×」の4項目については、実績はあるので「△」でもよいのではないかと感じた。
- ・資料 1 の表紙「※評価欄について」にて示されている、「×=指標 1・2ともに達成状況が不十分」を「×=指標 1・2ともに達成状況に課題がある」として、

「不十分」を「課題がある」（課題が残る）くらいにしてはどうか。

- ・ひとつの事業に限ったことではないが、活動を伝えるための広報について、募集時、事後報告、実施中に適切に行われたか。正しく伝わっているか、適切なタイミングで伝えられているかについても、評価が必要と考える。
- ・いずれも定量的評価により〇×がついているが、施策の方針（１）～（３）の視点で見た場合、評価対象となっている事業（取組）はいずれも重要で意義あるものであり、方針に対するその有効性の観点で、さらなる改善と実施を望む。
- ・コロナ対策による人数制限や招聘公演中止に伴う集客減に関しては止むを得ない。単純に数量的に測る形での指標であるためこのような説明になると考えられるが、来場者の実質的な年齢層や新規層の割合に着目し、今後の通りに組みに反映してもらいたい。
- ・近年、現代歌舞伎が成功を収めていることもあってか、能楽の他分野とのコラボレーションも親しみが加わり定評がある。年配者のファン層が多いため、あらゆる世代に向けて魅力的となるようバリエーションを広げアートの発信を目指してほしい。（能楽堂で Jazz、朗読とヴァイオリン等）

施策Ⅱ <つくる・つたえる> 活発な創作活動の推進

施策Ⅱの総括について

- ・文化芸術の欲求というものが、コロナ禍といえども、押さえることが限界に達して動き出したという印象。
- ・具体的かつ明瞭な総括となっており、良いと感じた。
- ・市民美術展第 60 回記念展関連は、企画内容の評価が高い。こうした定常的な事業での画期的な取組みは市民への強いインパクトとなる。
- ・市民美術展の応募者過去最多は、60 周年の節目であったことも大きいですが、コロナ禍において、絵画など個人の創作活動はより活発になったのではないかと。逆に、音楽や演劇など集団創作はコロナ禍が逆風になった感がある。いずれにせよ、コロナ禍でも創作・発表の機会をなくさず、育成事業を継続させたことには大きな意義がある。一方、施策方針（３）の文化活動団体間の交流と連携の促進に関しては「おいでんアート体験フェア」以外の具体的取り組みが見当たらず、検討が求められる。
- ・コロナ禍において美術の創作は、自粛しながら実現できるものとして活動者が増加したのではないかと。その発表の場である市民美術展はとても良い受け皿になったのではないかと。青少年音楽団体の発表の機会が増加傾向にあることはとても喜ばしい。
- ・美術作品は展示が主となるため、厳しいコロナ対策を必要としない創作活動であることが、吉と出たのではないかと。また、アーティストの年齢層が幅広いため、若手アーティストのネットを駆使した全国展開のアプローチ手法も、様々な分野で刺激を受け、街の活性化へつながったと言える。

主な取組 指標1（定量的指標）実績について

- ・高齢者・障がい者という福祉的要素が稀有に目立って、そのことが文化芸術の印象になっていかないように注意してほしい。
- ・コロナ禍の続く現状において、定量的評価は難しいが、それでも本市は回復傾向にあると感じる。際限なく量が増えていくものでもないと思うので、最終的な目標値を設定し、現状値を評価する事業があってもいいような気がする。
- ・発声を伴う発表の場合、前後客席と5m間隔を取る等、コロナ対策による規制があったため致し方ない数字と言える。その中でも継続できたという事実こそ称賛されるべきではないか。自己表現できる場を求める若者、子育てが落ち着いた主婦層、意欲的で経験豊富なシニア世代等がたくさんの場面で共鳴し合い、お互いを高め合っている伸び代がまだまだ残っていることが読み取れる。

主な取組 指標2（定性的指標）実績について

- ・2022年度実績の内容は、全体としての傾向なのか、一個人の感想なのか、判別できなかった。できるだけ個人的な傾向や感想ではなく、全体としての傾向を記載した方が読み取りやすいと感じた。
- ・文化芸術の成果指標として、定性的指標は、今後、定量的指標より重要になると思うが、現状、本市の定性的指標はあいまいで、評価結果に対する正当性には疑問が残る。誰がどのような観点で定性評価を行うのか、引き続き適正な評価の在り方、方法について検討が求められる。
- ・取組No.16～20は人材育成に関わる事業であり、長期的に実施している点で本市が他市に誇れる事業だと考えるが、育成された人材が、どのように本市の文化芸術振興に関わり寄与しているのか、もう少し丁寧に検証し評価してみてもいいかもしれない。
- ・市民美術展の、高校への働きかけを評価したい。青少年団体においては、OB/OGの活躍が継続の賜物と思われ素晴らしい。
- ・子どもが団員として在籍していくためには、周囲の手厚いサポートが必要であるが、ハイレベルな指導が受けられる一方、活動にかかる費用が高額であり（楽器メンテナンス含）、学業との両立も徐々に困難となり、高学年になるほど継続しづらい現状がある。遠方から名高い指揮者を招き、高額なギャラを支払わず、近隣の若手実力派等を発掘し育てていく、地域還元型の経営方針によって節税対策、団費軽減としてはどうか。

指標1と指標2の補足説明について

- ・No.17「ジュニアオーケストラの運営」について、子どもの数が減少する中で、増加の対策を講じるということは、一辺倒では、限界があると考えている。
- ・No.21「民芸の森活用事業」について、「全体としては活用できている」という説明と、評価の×がある意味矛盾しているように感じる。

- ・こちらも、評価の「×」が気になった。評価が「×」となる活動実績を展開してきたと受け取ることになる。「△」ではどうか。
- ・特異なジャンルでは人数だけの評価では疑問が残る。継続の意思を訴えることが必要か。
- ・「ジュニアオーケストラ」「こども創造劇場」は、補足説明にもあるように、部活動の受け皿としても重要な事業であると考えるので、新たなPR方法を検討すべきである。
- ・おいでんアート体験フェアにパフォーマンス体験が加わったことを評価したい。美術と舞台芸術の境界がますます取り払われつつある昨今の表現の世界において、「アート」の再定義を行なっていく必要性を感じている。広い意味で「表現」を扱うフェアとして発展して行ってほしい。青少年団体について、部活動の地域移行に伴う受け皿としての働きかけにぜひ期待したい。そのためには未経験者の参加へのハードルを下げる必要もあると思われ、レベルの維持と未経験者対応の両側面への工夫と配慮が求められるが、工夫して実現してほしい。
- ・No.17、19の「学校部活動の地域移行に伴う、活動の受け皿の一つとしてPRし、団員の増加につなげていく」について、部活動の地域移行が、中学校の既存の部活動中心に行われている中、部活動にないオーケストラや演劇をその受け皿にしていくために、どのような見通しをもっているか。地域移行する部活動の受け皿だけでなく、部活動がなくなり、学芸会も行われなくなっている小学生で、楽器を演奏してみたい子、演技を楽しみたい子の受け皿にもなるような取組も考えられるといい。
- ・学校部活動の地域移行は、完了している市もあるが、ブラスバンドの場合、部活動加入生徒は各自楽器は所有していないため、せっかく興味を抱いたとしても、市のオーケストラ加入までは敷居が高い。時代に合わせ、部活動不要論がささやかれる一方、生徒目線では学業一本化より何かと両立していた生徒の方が学力があと伸びするデータ、コミュニケーション力がアップする等心身の成長の一助となり得る部分もある。部活動コーディネーターの助言を元に豊田市も早急に地域移行を完了し、多角的な視点から部活動のあり方を現代に見合ったものへ確立してほしい。

施策Ⅲ <むすぶ・つなげる> 活動する人々の連携とまちの活性化への展開

施策Ⅲの総括について

- ・様々なネットワークが強化されていく方向で、とても良いと思う。
- ・具体的かつ明瞭な総括となっており、良いと感じた。
- ・施策Ⅲは、本市の特徴的な事業が並び、本市の文化振興における最も重要な施策だと感じる。どの取り組みもさらなる発展が望まれる。
- ・デカスプロジェクトの参加者数の大幅増加、および学校へのアウトリーチ件数の増加について、評価したい。
- ・デカスプロジェクトの大成功とは対照的に、地域に残る旧体制が若い世代、外国

人移住者に受け入れられず伸び悩む部分が顕著である。子ども会やPTAの存続が困難になりつつある昨今、地域伝統行事や伝統芸能を継承していくことは益々困難となるのでは。時代に合ったものでなければ受け入れられないと感じる。

主な取組 指標1（定量的指標）実績について

- ・あくまでも、コロナ禍での特別指標として捉えるべき。
- ・コロナ禍の続く現状において、定量的評価は難しいが、それでも本市は回復傾向にあると感じる。際限なく量が増えていくものでもないと思うので、最終的な目標値を設定し、現状値を評価する事業があってもいいような気がする。
- ・これまでに主役として扱われることの少なかった子どもへのアプローチが増えていく点、各地域での実施が成果をあげている点の評価をしたい。市民アートプロジェクトに関しては、登録メンバーが固定化して内輪盛り上がりの感が出てきてしまうことを懸念している。
- ・美術館マルシェはファミリー層に人気があるので、今後もぜひ開催していただきたい。桜も美しく、紅葉も楽しめるのも魅力。ただ地形上アップダウンが多く、ベビーカーや車いすでの移動は困難であるため、新たな博物館とのバリアフリー化に期待している。

主な取組 指標2（定性的指標）実績について

- ・文化芸術の成果指標として、定性的指標は、今後、定量的指標より重要になると思うが、現状、本市の定性的指標はあいまいで、評価結果に対する正当性には疑問が残る。誰がどのような観点で定性評価を行うのか、引き続き適正な評価の在り方、方法について検討が求められる。
- ・後継者育成や子どもたちによる運営企画など、未来を担う世代の実践的な体験の機会を創出できていることを評価したい。今後も居住環境や保護者の興味によって機会が失われることのないよう推進してほしい。また、アートそのものではなく、アートを通じた人々の交流や地域活性が生まれている点の評価をしたい。
- ・コロナに負けない人々の思いが伝わる。

指標1と指標2の補足説明について

- ・No.27「学校への文化活動者派遣事業」について、コロナ禍での状況で無理矢理増加を見込んでいくことは、一考すべきかと思う。
- ・施策Ⅰ、Ⅱも同様にかもしれないが、この項目については、「補足説明」ではなく、「指標1と指標2に基づく分析」か。
- ・市民レベルの企画創造力の育成活動と考えられる。長期的な継続が最も要求される。まちに起こった変化等評価が難しいが重要な視点。
- ・コロナ禍において、×の評価は適正ではない。
- ・×の事業に関してはコロナ禍の収束に伴い発展することを望む。デカスプロジェクトについて、オンラインの活用は有意義ではあるが、本物の体験に勝るものなしと思われるため、コロナ禍の収束に伴う増加を望みたい。

- ・表現者が施設訪問する場合、特に福祉施設は難しかったが、今後、徐々に復活していくことが予想される。表現者側としては、現場を踏むことで磨かれていく、育て上げられていくものなので、リスクを負っても本番が必要。状況次第でどんどんパフォーマンスしていくべきと考える。

施策Ⅳ〈つかう・いかす〉文化芸術活動を支える基盤整備

施策Ⅳの総括について

- ・文化芸術情報誌の活動力アップに期待している。続けながら、成果分析を行ってほしい。
- ・Face to Face の評価の下される施策項目。対処的な評価はよくない。人の入れ替わり、組織の壁を踏まえ、ノウハウの蓄積、伝承、改善、具体的な方策が必要。
- ・ハード、ソフト両面での推進が適切に行えていると感じる。総括にあるように、ソフト面の改善は常に求められ、挑戦を続けて欲しい。
- ・FB など SNS でも参合館の様子がうかがえ、豊田市の立派なパイプオルガンをはじめ施設の魅力アピールが確立しつつある。結果報告の発信と告知アップのバランスも良く、集客率アップとなっていると感じる。どんどん発信してほしい。

主な取組 指標 1 (定量的指標) 実績について

- ・No.35「民芸館・民芸の森の運営を担う人材育成事業」について、必ずふさわしい人が育成されていくと思う。根気よく頑張ってもらいたい。
- ・記入のないところの説明を、補足説明に入れてはどうか。
- ・NO.35、36 は、「定量的指標」が示せないということ。「-」でもよいのかもしれないが、このことが分かるような分かりやすい表記・補足があるとよい。
- ・ハード面での定量的評価はできない。サイトの閲覧数、市民ライターの数などソフト面は、さらなる増加を目指してほしい。
- ・豊田市コンサートホールは大都市コンサートより 1,000 円～2,000 円割安で、世界的著名音楽家の演奏に触れることができる。その際、大ホールは毎回ほぼ満席や完売となっており、遠方からかけつける熱心な音楽ファンもおり、好評を得ている。今後も魅力的な音楽家がやってきてくれることを期待するファンが多く存在する。

主な取組 指標 2 (定性的指標) 実績について

- ・様々な立場の人がリンクしていく状況が見えている。希望が持てる。
- ・記入のないところの説明を、補足説明に入れてはどうか。
- ・「-」でもよいのかもしれないが、このことが分かるような分かりやすい表記・補足があるとよい。
- ・WEB や SNS を活用して魅力を伝える媒体としての TAP マガジンの意義は大きい。広報誌や紙媒体にふれる機会の少ない若い世代の認知を更に広げてほしい。
- ・参合館 9 階多目的ルームは、主にミニコンサートとしての使用となっているが、大ホール使用時は楽屋が大ホール使用者優先となるため、毎回楽屋使用問題が発

生している。また、楽屋側の出演者専用トイレも必然的に使用できなくなるため、多目的ルーム主催側出演者は、大ホール使用時にはお客様用トイレをドレス姿で使用するようになる。どちらの利用者も平等に使用する権利があり、多目的ルーム側には出演者用のトイレを設置してほしい。

指標 1 と指標 2 の補足説明について

- ・ No.31「文化ゾーン整備事業」について、博物館のオープンを大きなきっかけとしてほしい。
- ・ 定量的指標と定性的指標のうち、記入のないところの説明を補足説明に入れてはどうか。
- ・ No.36 について複数受講となっているので、指標 1 の検討（参加者人数のカウント）などはできないか。
- ・ 施設等。利便性については市民、団体から不満の声を聴くことがある。事務的な処理だけではなく、利用者に寄り添ったアイデアを考える必要がある。この施策は何を実施したかだけではなく、多面性がある。
- ・ 評価方法は難しいが、No.36「施設職員の事業企画力・コーディネート力の向上」は大変重要だと考える。本市の文化芸術振興におけるコーディネート人材の専門性や企画力向上に関してはまだまだ課題があると感じる。
施策の方針（3）の施設職員の専門性強化は、文化振興財団の職員が主な対象になると思われるが、財団の人事や教育、運営の在り方にも関わる問題であり、さらなる意識改革と改善が求められる。
- ・ 施設職員の専門性強化について。施設内で業務に追われていると兎角内向きな視点になりがちで、街に出て市民が何にどのように文化芸術との接点を持ち、どのような活動をしているのか、どう暮らしているのかを見失いがち。施設を活かし、さらなる魅力創出と発信に繋げられるよう、今後も外部との連携や世界的な動向注視につとめ、市民目線での新しい広場づくりに尽力してほしい。
- ・ 何度かリニューアルしてはいるものの、文化振興財団のHPが見難いと感じる。掲載も度々遅れがみられる。コンサートホールのホームページと、一貫性を持たせてみてはどうか。（同じWEBデザイナーに依頼するなど）

総評について

- ・ 冷静かつ意欲的な姿勢であり、望ましい。
- ・ 基本的によくまとめられていると思う。パンデミック以後のこれから、どこに特に力を入れていくかが若干見えにくい。定性的指標については、すべての事業に同じ基準で表記するのは極めて難しいと思うが、数字だけを追っかけているわけではないと伝わるとよい。
- ・ 総評は、全体の結果や考察に基づいて行うものなので、資料の表紙に示すのはど望ましくないと感じた。
- ・ また、総評としては、短い文章に感じるが、このような形式でよいのか。より具体的な視点などを示す必要はないか。

- ・総評は、外部の委員が行っているのが、内部で行っているのか、評価を行う立場が誰であるのかが気になった。
- ・定性的評価の検討①狙いに対するの評価、②場の設定については、③PR は、④施策に対する項目の適正は、⑤ほか この整理の仕方によって、今後の取り組みの方向に大きく影響が出ることを期待する。
- ・先ず、コロナ禍においても事業を止めずに、知恵を出して前へと進めた本市の取り組みや姿勢を評価したい。一方で評価における定性的指標の難しさも感じた。現状、コロナ禍においては定量的指標も確実なものではない。総評にもあるように、定性的指標の妥当性をさらに高めていく必要があると感じた。
- ・コロナ禍においても動きを止めることなく継続している意義を感じる。
- ・コロナを理由に手を引くことはいくらでもできた中で、変わらず継続してきた各団体のそれぞれの熱意と文化芸術を愛する心、深い郷土愛とそれをバックアップしてくれた行政、ファンの力、地域の協力へ心より感謝する。いつの時代も課題は多く、改善に改善を求められるが、コロナ禍でも継続してきた方々は、このような混迷の時代にも負けなかったことが自信へと変わっていったのではないか。背中をしっかりと見せられたことを誇りに思って良いと思う。

その他

- ・パンデミック以前、中、以後という視点から、「以前」に戻す発想ではなく、パンデミックを経験して人々の意識に変化があることを踏まえ、特に中学生以下の若年層にとって3年間の影響は大きく、パンデミック以前の経験がないともいえるので、従前の振興計画に戻す発想から新しく力を入れる方策も考えていきたい。
- ・ここまで丁寧な資料をまとめることは大変であったと拝察する。
- ・VUCA（予測困難な）の時代と言われる現在、本市の文化芸術施策とその評価方法は今後さらに多様で流動的なものになると思われる。

本市は農村舞台アートプロジェクトやデカスプロジェクトに象徴されるように、地域の課題や財産を、外の風も取り込みながら、アートの力で解決・活用する事業を先進的・継続的に行っている点に特に大きな評価点があると思う。

文化芸術活動は個人の趣味的・生涯学習的な視点から、地域の課題解決や町の活性化、教育、観光など幅広い普及効果を期待する時代である。そういう意味では、受益者負担の考え方についても従来の狭い視野で図ることはできない。

また、デカスプロジェクトやその他の育成事業で得た人材やコンテンツを、市の事業にて活用するビジョンをもっと明確に持ってもいいように思う。いずれにせよ、本市の文化芸術施策が、今後も開かれた、先進的、挑戦的なものであることを期待する。

- ・時代のスピードは増すばかりで、私たちの意識も日々アップデートが必要。目標達成のための量的な効果を求めることも必要だが、時代の動向に柔軟に対応しつつ、向かうべき未来を見失うことなく一つ一つの事業の質を高めることに注力して推進してほしい。